

令和2(2020)年度 文部科学省委託事業

日独青少年指導者セミナーA1・A2 オンラインセミナー 事業報告書

事業概要

1. 事業趣旨

日本とドイツの青少年教育の現状や取組を理解し、両国の指導者が意見交換することを通して、青少年教育指導者の資質や能力の向上を図る。

2. 実施関係機関

(1) 主催

日本：文部科学省

ドイツ：家庭・高齢者・女性・青少年省

(2) 実施

日本：独立行政法人 国立青少年教育振興機構

ドイツ：A1 ドイツ連邦共和国 国際ユースワーク専門機関

A2 ベルリン日独センター

3. テーマ

<共通> 社会の課題や変化に対応するための青少年を対象とした取り組み

A1：若者を取り巻くメディア環境とコロナ禍の影響

～実務における課題と解決に向けた取り組み～

A2：子どもと若者の貧困－課題と解決に向けた取り組み

～コロナ禍における日独の子ども・若者の状況や現場での対応、支援策～

4. 参加対象者

(1) 日本側

A1：8名（昨年度派遣者6名、引率者1名、今年度応募者1名）

通訳：本間 純子

A2：11名（昨年度派遣者8名、引率者1名、今年度応募者2名）

通訳：岡本 美枝

(2) ドイツ側

A1：8名（今年度派遣予定者）

通訳：ティーテン 礼子

A2：8名（今年度派遣予定者）

通訳：シュテファニー・暁子 ハシュケ

5. 日時

<A1>

1回目 2020年11月13日（金）18:30～21:00（ドイツ時間 10:30～13:00）

2回目 2020年11月27日（金）18:30～21:00（ドイツ時間 10:30～13:00）

<A2>

1回目 2020年12月4日（金）18:00～20:30（ドイツ時間 10:00～12:30）

2回目 2020年12月11日（金）18:00～20:30（ドイツ時間 10:00～12:30）

6. 方法

Zoom ミーティングによるオンライン開催。

参加者は各自の自宅あるいは職場等から参加する。

事業報告

1. A1参加者名簿

(日本側)

		氏名	所属 役職
1	2019 派遣者	板倉 正直	社会福祉法人阿育会 ふたば保育園 園長
2	2019 派遣者	北湯口 孝	独立行政法人国立病院機構 久里浜医療センター 臨床心理士・公認心理師
3	2019 派遣者	徳武 英人	東京都立南多摩中等教育学校 社会科教員
4	2019 派遣者	中野 高子	諫早市立諫早中学校 心の教室相談員・長崎県メディア安全指導員
5	2019 派遣者	西川 明輝	株式会社NHK エンタープライズ プロデューサー
6	2019 派遣者	野口 美砂子	NPO 法人インフィーニティー、Class (株) 保育士、キャリアコンサルタント
7	2019 引率者	水澤 豊子	国立青少年教育振興機構 本部主幹
8	2020 応募者	杉山 仁夫	静岡市立清水和田島小学校 非常勤講師

(ドイツ側)

	氏名	所属 役職
1	Eva BERTRAM エーファ・ベアトゥラム	ノルトライン・ヴェストファーレン州 児童・家庭・難民・ 統合省 児童と青少年保護・メディアリテラシー課 課長
2	Matthias FELLING マティアス・フェリング	ノルトライン・ヴェストファーレン州 児童・青少年保護ワーキンググループ (AJS) 教育主任 青少年メディア保護担当
3	Christin LÜBBERT クリスティン・リュベアトゥ	ドイツ AWO (労働者福祉) 連盟 欧州・国際青少年交流担当者
4	Benjamin LUDWIG ベンヤミン・ルドゥヴィッヒ	ドゥロステ・ハウス ギュータースロー郡青少年交流事業 ソーシャルメディア・広報担当、国際青少年の出会い担当
5	Sabine MÜLLER-BUNZEL ザビーネ・ミュラー・ ブンツェル	メディア工房ポツダム 教育担当、教育学専門、メディアエーター
6	Meike PEDEMONTE マイケ・ペデモンテ	アルビヌス共同学校 ラウエンブーク スクール・ソーシャルワーカー
7	Anne RINN アネ・リン	トゥリアログ青少年援助公益法人 メディア教育士
8	Linda SCHOLZ リンダ・ショルツ	ノルトライン・ヴェストファーレン州 若者メディア文化専門機関 教育広報・編集

2. A 1 進行表

<第1回>

2020年11月13日（金）	
18:30（日本） 10:30（ドイツ）	<p>開会の挨拶 クラウドディア・ミアツォフスキー（IJAB 青少年政策国際協力課） 佐藤哲也（国立青少年教育振興機構 国際・企画課）</p> <p>進行：クラウドディア・ミアツォフスキー</p> <ul style="list-style-type: none"> セミナーの流れ 技術に関する注意事項 通訳者、スタッフの紹介
	参加者の自己紹介（ミニゲーム形式）
19:00（日本） 11:00（ドイツ）	<p>意見交換と討議</p> <ul style="list-style-type: none"> 若者を取り巻くメディア環境とコロナ禍の影響：参加者は毎日の業務上でどのような問題に直面しているか
19:45（日本） 11:45（ドイツ）	休憩
19:55（日本） 11:55（ドイツ）	意見交換と討議（続き）
21:00（日本） 13:00（ドイツ）	第1回 閉会

<第2回>

2020年11月24日（金）	
18:30（日本） 10:30（ドイツ）	<p>開会の挨拶 クラウドディア・ミアツォフスキー（IJAB 青少年政策国際協力課） 水澤豊子（国立青少年教育振興機構 主幹）</p> <p>進行：アニカ・ゲーリング（IJAB）</p>
	ウォーミングアップ（紙と筆記用具を使用）
18:55（日本） 10:55（ドイツ）	<p>意見交換と討議</p> <ul style="list-style-type: none"> 日独両国において若者を取り巻くメディア環境はどのような課題に直面しているか？
19:45（日本） 11:45（ドイツ）	休憩
19:55（日本） 11:55（ドイツ）	<p>意見交換と討議（続き）</p> <p>進行：クラウドディア・ミアツォフスキー</p>
19:55（日本） 11:55（ドイツ）	全体のフィードバック
21:00（日本） 13:00（ドイツ）	閉会

3. A1ダイジェスト

参加者

第1回 日本側 6名、ドイツ側 5名

第2回 日本側 7名、ドイツ側 4名

セミナーの概要

A1の参加者は、主に学校教育、社会教育の現場で青少年援助や指導に従事しており、本セミナーでは、まず、「若者を取り巻くメディア環境」という観点から、各自がコロナ禍での日々の活動において感じている問題点や課題について発表した。日独に共通する問題・課題としては、一斉休校等の影響で、子どもたちがメディアやデジタル端末に触れる機会が増えている現状に対し、IT環境（PC、Wi-Fiなど）の家庭間格差が拡大している点や、メディアリテラシーの重要性が挙げられた。また、教育行政においても、自治体や学校によって教育のデジタル化への対応がかなり異なり、地域格差があること、現場ではオンライン授業により教師の負担が増加したことなどが指摘された。ドイツの「メディア教育士」(※)の取り組み例には、日本側参加者の高い関心が寄せられ、同様のシステムが日本でも必要との認識が得られた。一方、コロナ禍の影響に関しては、文科省のGIGAスクール構想の推進を加速化することや、デジタル教育への懐疑的な見方に対して変化が出てきたこと、不登校の生徒が授業に参加できるようになったこと、バリアフリーになったこと、などポジティブな側面の言及もあった。

第2回ではコロナ関連以外にも議論の枠を広げ、提起されたテーマ「メディアとの付き合い方」、「ネットいじめ」、「ネット依存（メディアの使い過ぎ）」について、社会教育、学校教育の立場から活発な意見交換が行われ、テーマに共通する姿勢として、保護者や指導者が子どもと同じ目線に立って規制やルールについて「一緒に」考え、メディアの受容、理解、評価に対してポジティブ／ネガティブ両方の側面でコミットすることの必要性を確認した。

※ メディア教育士：ドイツで、主に学校などの教育機関および学外の社会教育施設や企業等で、メディア・リテラシー教育（メディアの使い方やその影響など）の実践に携わる職業。

<日本での取り組み例>



「若者を取り巻くメディア環境」に関する、長崎県社会教育委員会での報告会の様子。
(中野高子さん提供)

セミナーの議論の中で紹介された、日本の携帯電話会社による学校でのスマートフォン安全教室の様子。(出典：法務省ウェブサイト
http://www.moj.go.jp/JINKEN/jinken04_00116.html)



4. A 2 参加者名簿

(日本側)

		氏 名	所 属 役 職
1	2019 派遣者	大塚 広基	NPO 法人キッズドア 学習支援コーディネーター
2	2019 派遣者	杉村 優美	NPO 法人キッズドア 学習支援コーディネーター
3	2019 派遣者	中村 優一	一般財団法人あしなが育英会 グリーフプログラムディレクター
4	2019 派遣者	西田 勉	白山市立蝶屋小学校 学校ボランティア
5	2019 派遣者	西村 貴之	北翔大学 准教授
6	2019 派遣者	松田 愛子	広島県立生涯学習センター 振興課長
7	2019 派遣者	八島 奈津季	株式会社シリウス 児童発達管理責任者
8	2019 派遣者	吉迫 由美	NPO 法人千曲市環境市民会議/千曲市役所 理事/公務員
9	2019 引率者	濱谷 弘志	北海道教育大学 准教授
10	2020 応募者	佐野 仁美	鈴鹿市役所 子ども政策部 子ども家庭支援課 課長

(ドイツ側)

	氏 名	所 属 役 職
1	Ulrike STROHMENGER ウルリーケ・シュトロメンガー	アウトリーチ アウトリーチ型職業相談・コーチング担当 (教育学 修士)
2	Antje FUHRMEISTER アンティエ・フアマイスター	福音ルター派教会東ハンブルク教会地区、保育部 教育部長、保育施設連合体の事務局長
3	Gabriele LEHNERS ガブリエーレ・レーナース	アンマーラント郡市民大学 ソーシャルエデュケーション専門職
4	Carolin GENZ カロリン・ゲンツ	公益法人キンダーシュテルケン チームリーダー、プロジェクトリーダー
5	Nina RINNINSLAND ニーナ・リニンズラント	プレーメン SOS 子ども村 (入所施設) 教育支援担当
6	Ronny FEHLER ロニー・フェーラー	ベルリン州教育学術労働組合 政策担当
7	Anja LITTEL アニャ・リテル	インゴルシュタット市ディアコニー事業団 ソーシャルワーカー、オープン型青少年育成活動 (学士)
8	Thomas AXTHELM トーマス・アクストヘルム	エアフルト市自然の友青年部 ソーシャルワーク・ソーシャルエデュケーション (専門大学 修士)

5. A 2 進行表

<第1回>

2020年12月4日（金）	
18:00（日本） 10:00（ドイツ）	開会の挨拶 三浦なうか（ベルリン日独センター） 進行：三浦なうか <ul style="list-style-type: none"> ● セミナーの流れ ● 技術に関する注意事項 ● 通訳者、スタッフの紹介
	参加者の自己紹介
18:10（日本） 10:10（ドイツ）	自己紹介
18:50（日本） 10:50（ドイツ）	休憩
19:00（日本） 11:00（ドイツ）	意見交換と討議 <ul style="list-style-type: none"> ● コロナ禍における現場での対応 等
20:20（日本） 12:20（ドイツ）	意見交換と討議（続き）
20:30（日本） 12:30（ドイツ）	第1回 閉会

<第2回>

2020年12月11日（金）	
18:00（日本） 10:00（ドイツ）	開会の挨拶 <ul style="list-style-type: none"> ● ユリア・ミュンヒ（ベルリン日独センター 事務総長） ● 大内克紀（国立青少年教育振興 子どもゆめ基金部長） 進行：三浦なうか
18:15（日本） 10:15（ドイツ）	自己紹介
18:40（日本） 10:40（ドイツ）	意見交換と討議 <ul style="list-style-type: none"> ● ベストプラクティス事例 等
19:30（日本） 11:30（ドイツ）	休憩
19:35（日本） 11:35（ドイツ）	意見交換と討議（続き）
20:20（日本） 12:20（ドイツ）	全体のフィードバックとまとめ
20:30（日本） 12:30（ドイツ）	閉会

6. A2ダイジェスト

参加者

第1回 日本側 9名、ドイツ側 7名

第2回 日本側 7名、ドイツ側 5名

セミナーの概要

A2の中心テーマは「子どもと若者の貧困」で、参加者は主に公的あるいは民間の支援組織でソーシャルワーク等に従事している。本セミナーでは、まず、コロナ禍での青少年の現状と現場での対応・支援策についての質疑応答の形で、日独双方が各自の取り組み例を紹介し、議論を進めた。子どもや若者への物資面の支援に関して、多くの発言や取り組み紹介があった中で、学習環境（物資面：文具・教材、タブレットの支給や貸与、環境面：インターネット環境の有無、家庭内での子どもの勉強場所）の重要性、ニーズに合った個別の学習支援、地域などとの連携や支援が届きにくい家庭、（特にドイツで）外国人家庭へのアプローチの大切さが浮き彫りになった。休校、施設閉鎖時の対応として、対面が叶わなくても、個人的な声掛け（手紙、電話、メール等）でつながりを示し続けることが必要との意見が上がった一方で、日本の事情として、学校給食や子ども食堂の休止に伴う食事支援・確保の課題も指摘された。また、政府による緊急支援についての意見交換では、日独ともに、富裕層と貧困層との格差が拡大し、中間層のやせ細りも進んでいるという実感が聞かれた。

第2回では、健康促進、病気予防の観点からの取り組み例をきっかけに議論が広がり、日本における罹患家庭への差別を例とした、社会の分断の問題や、医療や児童福祉現場では支援する側の精神面のサポート、心のケアが、雇用維持のためにもきわめて重要との認識を共有した。接する大人が心身ともに健康であるからこそ、子どもたちの健康を守ることができる、という日本側参加者の発言には、多くの参加者が共感の声が上がった。また、教育のデジタル化については、日本の現場での遅れがコロナ禍で露呈した、との言及があり、教師や施設職員などのデジタルスキル向上が課題として指摘された。

<日本での取り組み例>



新型コロナ対策の取り組みとして、NPO法人キッズドアでは、困窮子育て家庭に「家庭学習応援パック」を配布。

あしなが育英会の日帰りプログラムでは、子どもたちにもわかるように、イラストを使って感染対策について説明を行った。

(中村優一さん提供)



7. 参加者のコメント

オンラインセミナー終了後に、全参加者に対し事後アンケートを実施した。

- ★ オンライン交流の可能性について、両セミナーともに好意的な感想が多く見られた。
 - ・ 通訳を交えての会議にもかかわらず円滑だった。
 - ・ 多くのグッドプラクティスを聞くことができ、実り多い時間だった。
 - ・ 同じグループの仲間やドイツ受入機関のスタッフと再会できて有難かった。
 - ・ コロナ禍では、オンラインの活用が大切だ。このような海外交流の機会を継続して提供してほしい。
- ★ 一方で、特に事前／事後のフォローについてなど、要望や改善策も多く寄せられた。
 - ・ 当日は時間が限られており、課題解決のヒントを得るには至らなかったため、事前の課題共有や、日本団内で協議する時間を作ってほしい。
 - ・ 事前に質問事項を文書で共有する。
 - ・ テーマを更に絞る。
 - ・ 自由討論で課題や解決策を出し合ったあと、それを深める場を別途設ける。

8. 全体の総括

本事業では例年、ドイツへの日本団の派遣（15日間）とドイツ団の受入（15日間）を実施し、青少年教育指導者の能力の向上を図ってきたが、令和2年度においては、新型コロナウイルス感染症拡大に伴う、海外渡航や入国に関する厳しい制限措置により、実地派遣・受入を中止せざるを得なくなった。

上記の状況でも何らかの形で交流事業を継続するため、日独双方の実施機関で検討を重ね、昨年度の参加者および今年度の参加予定者を対象に、オンライン会議ツール（Zoom）を使用し、A1、A2の固有のテーマとコロナ禍の影響とを関係づけながら議論を行う、オンラインセミナーとして開催することとした。

前例のないオンラインでの交流事業実施にあたり、準備作業として、参加者にはセミナー参加方法についてのマニュアルの配布、マイク・カメラの動作チェック等、テクニカル面でのサポートを随時行いつつ、既にオンラインでの事業についてノウハウのあるドイツ側実施機関のIJABならびにベルリン日独センターの担当者と協議を進めた。継続的に本事業に協力して頂いている通訳のお二人のご尽力もあり、大きなトラブルもなく全4回のセミナーを終えることができた。

画面越しで討論することによるコミュニケーションの難しさや、通信環境によるタイムラグなどが懸念されていたが、オンラインという実施形態でも交流の質を大きく損ねることなく、積極的な意見交換を行うことができ、参加者からも「オンラインでも実り多い意見交換ができることがわかり、良い経験だった」など、肯定的な声が寄せられた一方で、リアル交流の重要性も再認識されたようであった。また、昨年度参加者にとっては同じ団の仲間と再会し、派遣事業後の動向や成果を確かめ合う良い機会となったようである。また、実地訪問が叶わなかった今年度応募者にも国際交流の場を提供できた点においても、意義ある事業となったと考えている。